

# パンタナール通信

一般社団法人 南北米福地開発協会 会報 2017年10月1日 169号  
世界平和地球村の建設と自然環境の保護

## 第17回国際協力青年奉仕隊



フェルテ・オリンポ市の中高生と  
青年奉仕隊員たち（8月28日）



市内各所を歩いてゴミを拾い集める。



公共施設を訪ねてゴミ箱を設置。



ドラム缶を半切りにした大型ゴミ箱。

二十三日 パラグアイの首都アスンシオンに到着。空港に来てくれた中井氏の姿が嬉しい。南半球は冬だと思ってきたら、意外にも空気が熱い。しかし湿度は低かった。  
二十四日 チャーターしたバスに、スリケース、プレゼントの衣料、生鮮野菜等を積み込む。約七時間かけて、メノー教徒の移民が理想郷を目指してつづった町、ローマ・プラタに移動。佐野氏の解説と案内で、開拓史博物館を訪れ、信仰・正直・勤勉を貫いて、あらゆる逆境を克服してきた歴史を学ぶ。彼らは私たちの先駆者と言える。

二十五日 未舗装の国道を、パラグアイ川沿岸の町オリンポへと移動。モウモウたる砂塵は車内にも充满し、マスクと忍耐力とが必須。ひた走ること約八時間でオリンポの研修所に到着。共同でキヤンペーンを行うオリンポ市のコレヒオ（中・高校）の校長宅、および市会議長宅で、打ち合わせ。町も山も満開の桃色ラバーチョが美しい。

二十六日 市庁を表敬訪問。議長の歓迎を受けたが、皆明るく、堂々としている。校長が校は休みだが、数十名の有志生徒が集まり、奉仕隊と対面。隊員は一人ずつ自己紹介したが、皆明るく、堂々としている。校長がクリーンキャンペーンについて生徒らに訓示。奉仕隊から「カンパニーヤ・オリンポ・リニア（清潔なオリンポ）」とロゴの入ったシャツを学校に寄贈した。（次面に続く）

第十七回国際協力青年奉仕隊は、男子十一名（うちチリからの参加者一名）と女子六名の浣剤とした若者たち。八月二十二日に成田空港を発ち、南米パンタナール地域でクリーンキャンペーン、植樹などの奉仕活動と体験学習を行い、九月九日に元気よく帰国しました。またアスンシオン空港で別れた三名の男子隊員は、中期ボランティアとしてレダ基地で活動しています。

オリンポで共同クリーンキャンペーン！



ミサ後、聖堂正面にて、司祭と奉仕隊員たち。8月27日



オリンポのカトリック教会聖堂で壇上に立つ奉仕隊員たち。



オリンポの丘より望むパラグアイ川。



オリンポ研修所の室内を塗装する準備。



オリンポ研修所で毎日楽しく食事。

(一面より続く)また、当会が準備したドラム缶のゴミ箱五十個と、市販のゴミ箱五個とに「きれいな町! きれいな魂!」とデザインされたシールを皆の手で貼った。その後、市の中心の公園広場に移動し、校長を中心に十二個の鉄製ゴミ置きスタンドを立てる作業をした。これを終えた後、奉仕隊は午後から昨年の国際チームが植えたニーム苗木の欠株を補う作業に汗を流した。二十七日 日曜日早朝、カトリック教会のミサに参加。市民たちは、奉仕隊のオリエンポ来訪について、すでに何日も前からラジオ放送で繰り返し聞き、この日を楽しみにしていたとのこと。ミサの最後に奉仕隊が壇上に招かれ、会衆に紹介された。そして一隊員がリコーダーを演奏すると、聖堂内に美しく響いて会衆を魅了した。次に奉仕隊が「エレストゥ」という、有名なスペイン語の歌を合唱すると、多くの会衆が声を合わせて歌つた。この時の感動は、多くの市民から後々聞かされることになる。ミサが終わると、司祭と奉仕隊は聖堂の正面石段に並び立ち、歴史的な記念撮影をした。研修所に戻ると、クエジャール市長夫妻が来られた。「私たちには、何はなくとも大自然と水が豊富にあります。」奉仕隊員のような若者たちがもつとオリエンポに来てくれるという、町を発展させて欲しいというのだ。この後、隊員たちはオリエンポ家庭教会(レイナルド教會長)の日曜礼拝に参加した。

午後はオリエンポ研修所の修復作業。プロジェクトの提唱者、文総裁夫妻が使っていた寝室と、居間兼食堂の内壁を塗装するといい水性ペンキを塗る。嬉々として作業する若者たち。ここは小規模ながら、永く、いつまでも守つて行きたい貴重な家である。夕方、地元の青年たちと、オリエンポの丘に登る。隊員たちは、地平線まで続く広大

なパンタナール湿原を肉眼で見た。悠久なるパラグアイ川の蛇行。かの美しく雄大な空間は、十分に彼らの心を引きつけた。二十八日 七時の始業に合わせてコレビオに行く。校庭に整列した教師、生徒たちが国歌を斉唱し、国旗を掲揚。これが普通にクリーンキャンペーンを行うこと。生徒らと奉仕隊員らとの混合チームを五班に編成し、それぞれ地域を分担してドラム缶ゴミ箱を設置し、公的機関を訪れてキャンペーンの趣旨を話し、市販品のゴミ箱を置かせてもらう。第一班に同行すると、小学校、女子修道院、税務局、警察署、病院、裁判所、等々を順次訪れて行く。狭い町なので、移動時間はわずかだ。キャンペーン隊は、どこへ行つても笑顔で歓迎された。当然のように思われるかもしれないが、大きなゴミ箱を人の家に入れるということは、そう単純な話ではない。ラジオ放送のおかげもあるが、それ自体がこの十八年間、『隣人を愛しなさい』と言う教えを地道に守り、育んで来た土壤に芽生えた希望ではないか。一巡して学校に戻つて来た混合部隊は、奉仕隊員たちと大縄跳び、武道、フリスビーなどをして、十時頃まで楽しく過ごした。そして大きなボリ袋を一枚ずつ持つて、ゴミ拾いに出発した。県庁前通りを除き、ゴミは町中の至る所に落ちている。生徒たちは、手づかみでゴミを拾い上げ、次々とゴミ袋に入れて行く。コレビオの生徒たちが比較的裕福な家庭の子女であることを考慮すると、見えていて爽快な気分になる。課外授業ということではあるが、おしゃべりしながら、とても楽しそうだ。

午後、奉仕隊は隣接する小学校を訪れ、日本の救援衣料センターから寄贈していたいた衣料品のうち、お揃いのシンプルなTシャツを生徒代表に手渡した。そして、先住民子女の小学校に行き、(三面に続く)



第7回奉仕隊が植えたニーム並木が大きく育った。



欠株の補充を完了。苗が育って永く生きるように「ビバー！」と叫ぶ。



インディヘナの小学校にて。



でかボールは柔らかくて、ゆっくりと飛ぶ。



子供の目線で折り紙を教える。



オリンポからレダへ3時間の船旅。



男子は1-4で負け。女子は0-0。



コレヒオの講堂で歌とダンス。大受けした。

(二面より続く) たくさんの単品衣料を子供たちに分配してもらうべく、教師たちに手渡した。続いて子供たちとの交流の時間。でかボール遊び、大縄跳び、シャボン玉、折り紙、フリスビー、肩車、変顔メーク等々、全力で遊びまくつた。別れの時間が来ると、ハグ攻め、握手攻め。短い訪問だったが、泣きそうな男の子が忘れられない。

## 二十九日

オリンポ

の最終日。まずニームの街路樹の植え替えを手際よく完了。そしてコレヒオに行き、講堂で教師と生徒たちを前に、歌と踊りを披露し、大喝采を浴びる。学校側も優雅なパラグアイの伝統舞踊を見せてくれ、互いに感動。最後は、サッカーの交流試合だ。男女別に、学校チームと奉仕隊チームが対戦。優れた選手を揃えて来た学校チームは強かつたが、双方全力で激突する姿が勝敗を越えて素晴らしい。午後一時、お互いに笑顔で手振りながらの別れとなつたが、また必ず会えるような気もした。

昼食後すぐにレダからの迎えのボートに乗つた。船着き場には、親しくなつた生徒らが見送りに来た。

（四面に続く）

## 奉仕隊員の感想文（オリンポでの歩み）

● オリンポでの歩みが自分にとつては印象的で、ただただこの地を愛るために、この人を愛するために、という思いを持ちながら汗を流す。それが純粹に気持ちよくて、やつぱり為にいきるつて素晴らしいことだなと感じた。他方、自然はとにかくすごかつた。動物がいることで生まれる躍動感。何でもない道に馬がいること。きれいな空に鳥の飛んでいく姿。自然の中にある家。自然と共に存していい

ものは、本当に心を満たしてくれると思つた。（27歳・男） ● 日本では薄れつつのよ

うな大切なものの。人と人とのつながり。この町にはそれがありました。それがとても愛おしくて、この町がとても好きになりました。

しかし、この地が日本のように発展し、テクノロジーが多く導入されるようになれば、それが無くなってしまうんじゃないかなとも思いました。日本と違う文化を肌で感じ、とても

強いインパクトを受けました。（20歳・男）

● 自分が日本で生活しているときはなかなか神様を感じるのは難しいですが、パラグアイで生活すると、植物一つを見ても、神様が

私たち人間を愛していると分かります。地球の反対側で生活することで、視野が広がり、物事をより広く考えることができると思いま

ラグアイ川を遡ること約三時間、日陽園レダ基地に一行が到着。中田所長をはじめとするレダ基地スタッフの出迎えを受けました。上陸した若者たちは、小高い堤頂に立ち、夢に見たレダ基地を目にした。

オリンポの教会訪問と続きますが、本紙次号で報告いたします。また奉仕隊を迎えるにあたつて、佐野氏、中井夫妻、中田所長と伊達氏ほかレダ基地のスタッフの尽力が極めて大きかったことを特筆したいと思います。（小田記）

（21歳・男）

